

未来



全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中野支部
機関紙「みらい」
NO. 4375
23年8月22日(火)
Tel・Fax 095-828-1953
文責 支部書記長

日本の一番長い日 戦争の終わりと、 御前会議の決断！

おはようございます。
今年が初盆で、遠くの家族が帰省し、賑やかな一週間だった。
お盆といえば、先の大戦で昭和天皇が「終戦」のラジオ放送をした日で「終戦」記念日だ。戦争史では、九月二日の東京湾の米艦・ミズリー号の艦上での降伏文書調印式で正式な敗戦日だ。

戦争はどのように終結したのか。一九四五年七月十七日、連合国がドイツのポツダムに集まり日本への降伏通告を話し合う。これがポツダム宣言で七月二十六日に日本へ無条件降伏が通告される。しかし日本の鈴木首相は七月二十八日、これを黙殺し、戦争継続となる。

ところがこのポツダム会談中の七月十六日、アメリカは三個の原爆を完成させ、原爆は「ポツダム宣言黙殺」からわずか十一日後の八月六日に広島へ、九日に長崎に投下された。
八月十四日、日本では天皇も加わった御前会議で、ポツダム宣言受諾(無



条件降伏)を決定し、十五日、天皇の「終戦」放送となる。
ではなぜここまで宣言受諾が遅れたのか。日本はなにを考えていたのかだが、最大は宣言に天皇制維持の明言がなかったからである。歴史本をみる。



藤原彰の「太平洋戦史論」には、「七月二十六日のポツダム宣言の黙殺をした政府は、原爆投下、ソ連の参戦を受けて、八月九日から十日に御前会議を開いた。原爆投下による国民の被害に関心を示さなかった支配層は天皇制と国体維持にのみ関心があった。八月十一日、米国の國務長官の回答文で、天皇制の存続の可能性が示され、十四日の御前会議でポツダム宣言受諾が決定した」とある。

藤原彰の「太平洋戦史論」には、「七月二十六日のポツダム宣言の黙殺をした政府は、原爆投下、ソ連の参戦を受けて、八月九日から十日に御前会議を開いた。原爆投下による国民の被害に関心を示さなかった支配層は天皇制と国体維持にのみ関心があった。八月十一日、米国の國務長官の回答文で、天皇制の存続の可能性が示され、十四日の御前会議でポツダム宣言受諾が決定した」とある。

ところで戦争被害は原爆だけではない。沖縄戦や空襲による戦死者は、

一方、日本の戦争加害では、アジア人の死者は二千万人とされる。さらに一九三九年から一九四五年の敗戦までの間、朝鮮人の日本への強制連行者は七十二万人を超え、うち炭鉱労働者が三十三年表から)。

大戦中、空襲は連日続き、一九四四年十一月から敗戦まで、原爆被害を除き、本土の空襲被害は少なくとも死者二十九万人、家屋全壊焼二百二十一万戸、罹災者九百二十万人といわれる。(東京空襲を語る会)から)。



天皇の戦争終結宣言は、十四日に録音済みであり、この日も軍部は「勝った、勝った」と誇大宣伝に終始し、国民はそれを信じ込まされていた。

この長く暑い夏の八月十五日は、戦史として多くの本で語られているが、国民と政府が「二度と戦争はしない」という固い決意に結びつかなければ、三百万人の死者という尊い犠牲が無に帰すし、戦争の反省とはならない。



仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。
期間雇用社員の希望者全員が正社員化を。
ゆめを、均等待遇、なぐさみ差別。ユニオンは労契法裁判に勝利するぞ!